

ようこそ野外民族博物館リトルワールドへ

活動趣旨

リトルワールドは、1983(昭和 58)年に開館した、世界中のさまざまな民族の文化や暮らしぶりを紹介する博物館です。人間は数百万年の進化の後、それぞれ与えられた環境の中で、生存と繁栄のために、生きるための技術、意思を交わすための言語、社会のしくみ、他の民族との関わり、自然観や世界観などに知恵を働かせてきました。文化とはどれもこうして培われてきた人間の知恵の結晶であり、これら文化をより身近なものとして体験・理解しようというのが当館の趣旨です。そのためにリトルワールドでは、学術的な調査研究をもとに、世界各地の家屋、生活用具などの収集、保存、解説、展示をしています。

現在地球上に暮らす私たち人間一人類、ヒトは、ひとつの種、同じ生き物一動物一ですが、ずいぶん違うところもあります。人間一般がもつ共通性と民族や地域ごとにある多様性は、人間の特徴のひとつです。

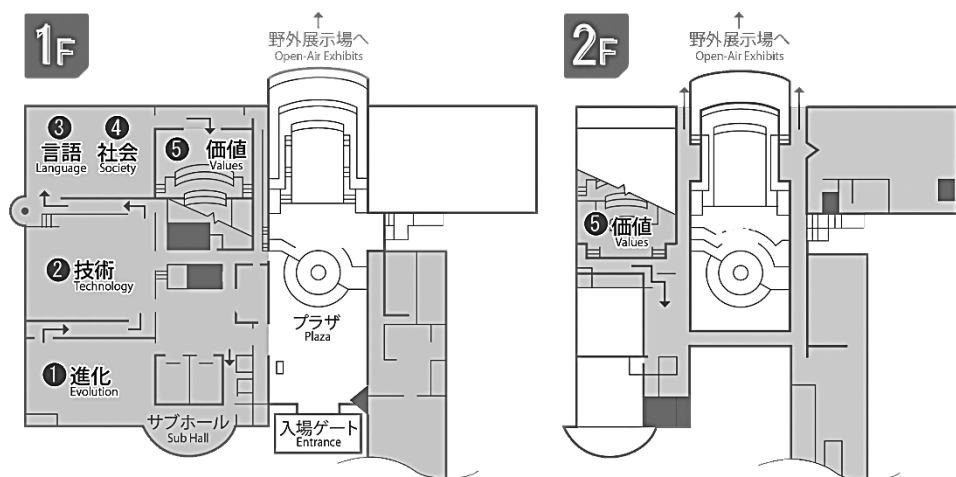
リトルワールドでは、本館展示室と野外展示場という2つの展示を通して、「人間とは何か？」ということについて、みなさんに考えていただきたいと思っています。



本館展示室

世界各地から収集した民族資料約 6000 点を、テーマごとに 5つの部屋で展示しています。

地域や民族を超えて、同じ目的のために考え、作り、使う 道具・モノを見くらべて、人間の 共通性・普遍性、あるいは、 民族の独自性・多様性を探ってください。



本館展示場平面図

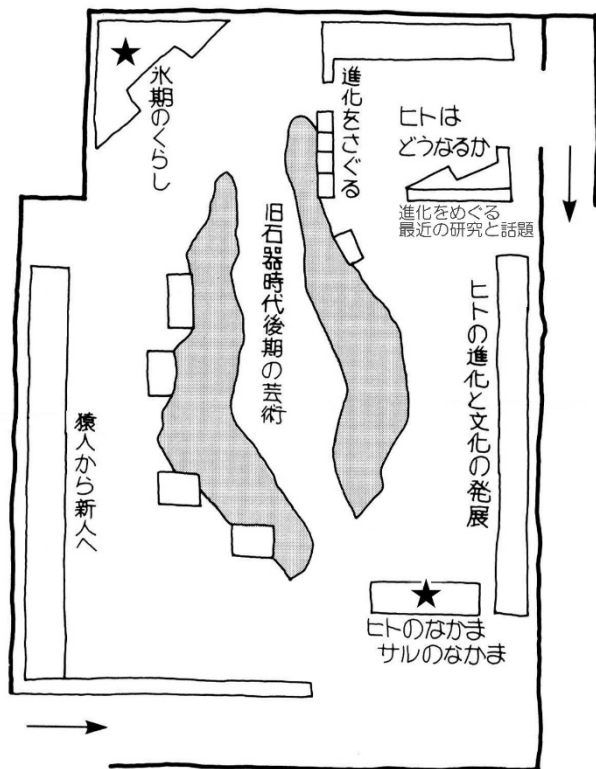
野外展示場

23の国・地域の31家屋で、各地の特色ある文化を紹介しています。家をまるごと移築、復元、展示するのは、住まいにはそれぞれの民族の知恵や知識や技術が集積しているからです。展示する家や生活用具から、そこに住む人びとの暮らしぶりを想像して下さい。

なお、国際情勢の変化や学術研究の発展にともない、展示の一部に現状にそぐわない箇所が生じておりますが、状況や学説の安定をまって改訂する予定です。どうぞご了承のほど、お願いいたします。

ほんかんだい しつ しんか
本館第1室：ヒトのはじまり——進化

ヒトが現在のような ^{からだ} 身体になり、現在のような文化を ^{はってん} 発展させる
 までには 600 万年とも 700 万年ともいわれる長い年月が
 かかっています。この展示室では、^{じんるい} 人類のなりたちとその ^{せいぶつてき} 生物的、
^{ぶんかてき とくちょう} 文化的特徴、そして全世界への ^{ひろ} 拡がりを ^{しょうかい} 紹介します。



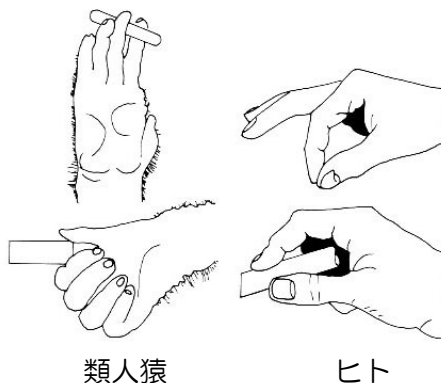
EVOLUTIONS

Through biological specimens and prehistoric artifacts, this hall examines the process of human evolution and the diffusion of human beings to all over the world.

ヒトの器用な手^{きよう}

ヒトは直立二足歩行をすることにより、両手が自由になりました。それだけでなく、ヒトの手は脳の^{のう}発達^{はったつ}と互いに作用しあって、たいへん器用な指さばきができるようになりました。

ヒトの手は、親指が長く、他の4本の指と十分に^{たいこう}対向しているの^ので物を上手に「にぎる」、「つかむ」、「つまむ」ことができます。いっぽう、類人猿^{るいじんえん}は親指がみじかいので、ひとさし指と中指とで、あるいは折り曲げたひとさし指と親指とで物をつかみます。



マンモスの骨で建てた家

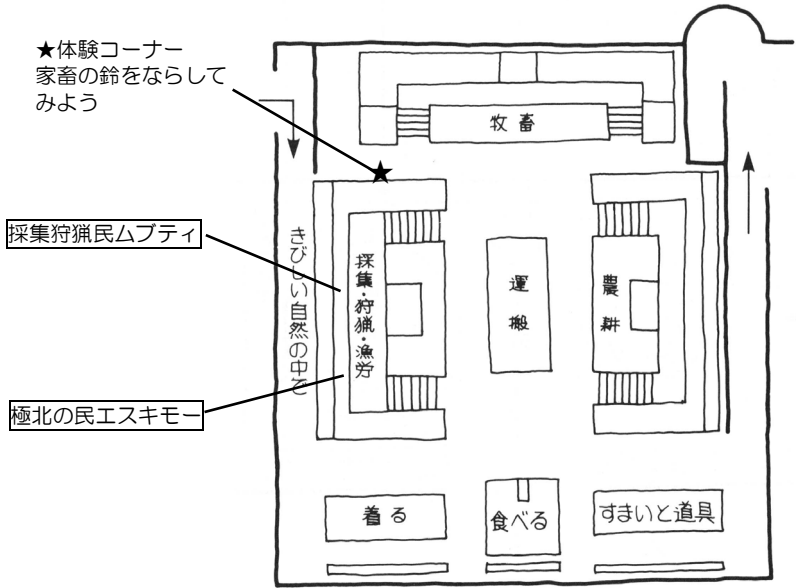


シベリアでは、マンモスの骨や^{きば}牙で建てた数万年^{あと}前の住居^{あつ}跡が発見されています。直径^{ちようけい}約5mのドーム^{がた}型で、骨組みを丸太とマンモスの牙でつくり、その上に皮をかぶせた住居です。毛皮を^お押さえるためにはマンモスの牙や骨が利用され、ドームの^{せつち}接地部分の

まわりには、マンモスの頭部やアゴの骨がならべられていました。ジオラマでその様子を再現しています。身の回りのものを活用し、^{きのう}機能的な住居や衣服を発明して寒さを^{こくふく}克服した人々は、やがてアラスカへわたりアメリカ大陸を南下していきます。このようにヒトは、生物学的な変化ではなく、文化によって新しい^{かんきよう}環境に^{てきおう}適応していった結果、世界中へ広がっていきました。

ほんかんだい しつ ぎじゅつ
本館第2室：生きるための工夫——技術

器用な手と、それと共に発達した脳により、ヒトは多様な技術を編み出し、いろいろな道具を作ってきました。およそ1万年前まで、私たちの祖先は、野、山、川、海で生きる狩猟、採集、漁労の民でした。その後農耕や牧畜も生業としはじめましたが、多様な自然環境に適応して生活するために、食料の獲得とその調理、衣類、住まい、輸送などの技術を発展させてきたことは、人類共通に見られることです。この展示室では、人類のさまざまな技術を民族資料2000点余と映像プログラム40本で紹介しています。



TECHNOLOGY

Adapting to environments, human beings have developed various techniques: getting food, cooking, clothing, housing and transportation. This hall exhibits human achievements in technology.

きびしい自然の中で生きる

- 砂漠のサン (ブッシュマン) : アフリカ南部、カラハリ砂漠 (1962)
 極北のイヌイット (エスキモー) (1976)

着るための工夫

- 1 身体の装飾と刺青 ブラジル (1975) とインドネシア (1982)
 2 ミン族のペニスケース パプアニューギニア (1968)
 3 木の皮でパンツを作る コンゴ民主共和国、ムブティ (1972)
 4 ハンモック ブラジル、カマユラ (1975)
 5 羊毛を手でつむぐ デンマーク、フェロー諸島 (1979)

食べるための工夫

- 1 クカクカの石蒸し料理 パプアニューギニア (1968)
 2 サゴ澱粉精製インドネシア、イリアンジャヤ、アスマット (1982)
 3 ユカの毒抜き コロンビア、アマゾン河支流 (1972)
 4 テフの草でパンを作る エチオピア、アムハラ (1980)
 5 塩づくり インドネシア、イリアンジャヤ、ダニ (1968)
 6 ソバのごはん 中国、雲南省、アシ (1981)

採集・狩猟・漁労 : オセアニア

- 1 海と川から食料をとる オセアニア各地 (1969,77,82)
 2 素もぐり・真珠母貝とり ツアモツ諸島 (1969)
 3 凧あげ漁 ソロモン、マライタ島 (1971)
 4 シュゴン漁と海亀漁 パプアニューギニア (1977)
 5 サメの輪どり サモア (1969)

採集・狩猟・漁労 : アフリカ

- 1 森の中で採集する コンゴ民主共和国、ムブティ (1972)
 2 網の追込み猟 コンゴ民主共和国、ムブティ (1972)
 3 ナイル川のカバ狩り 南スーダン、ヌエル (1979)
 4 イツリの森で象を狩る コンゴ民主共和国、ムブティ (1972)

農耕 : イモと畑作

- 1 マンジョウカの収穫 ブラジル、カマユラ (1975)
 2 マブリックのヤムイモまつり パプアニューギニア (1977)
 3 タロイモの料理 ソロモン、サンクリストバル島 (1974)
 4 ムスタンのソバづくり ネパール、チベット (1977)

農耕 : 焼畑と水稻耕作

- 1 焼畑の陸稻栽培 タイ北部、アカ (1974)
 2 ダニの焼畑 インドネシア、イリアンジャヤ (1970)
 3 水田の稲作 中国、雲南省、白族 (1981)
 4 水稻の収穫 インドネシア、バリ島 (1967)

牧畜 : ヨーロッパ・アフリカ・アメリカ

- 1 サーミ人のトナカイ放牧 ノルウェーとフィンランド (1980)
 2 アルプスの冬の牛追い スイス (1971)
 3 ナイル川で牛の放牧 南スーダン、ヌエル (1979)
 4 ラクダの血と乳を飲む ケニア、トゥルカナ (1980)
 5 ケチュアとコンドル ペルー、アンデス山地 (1972)

牧畜 : 西アジア・中央アジア・北アフリカ

- 1 高原の遊牧民バクティアリ イラン (1972)
 2 ヤギや羊を放牧する エジプト、ベトウィン (1982)
 3 チベットのヤク遊牧 中国、チベット自治区 (1982)
 4 ヤギの放牧 中国、雲南省、アシ (1981)
 5 トルクメン族のケチャー作り イラン、ゴルガン高原 (1982)

※映像は自動再生しています。ご了承下さい。

極北の民 エスキモー

エスキモーは、北極圏に沿った7000キロ以上の広大な地域にちらばって暮らす複数の民族の総称です。

彼らは、グリーンランド(デンマーク領)、ロシア、アメリカ、カナダのそれぞれ一部、計4つの国にまたがって暮らしています。その中のカナダ・エスキモーの人びとを「イヌイト」と呼ぶこともあります。

エスキモーの伝統的な食生活は狩猟によって得た生肉が中心です。アザラシやセイウチ、クジラ、カリブー(トナカイ)などの大型海獣・動物、サケやマスなどの魚を捕獲していました。寒冷な気候のために植物採集によって栄養を得ることは困難ですが、その代わりに生肉を食べることで、ビタミンCやビタミンDといった栄養を摂りました。もし、エスキモーの人びとが肉を煮たり焼いたりして食べ続けたら…必要な栄養が摂れず、病気になってしまうかもしれません。



*エスキモーの居住地域

工夫された漁法

エスキモーの人びとは海の生き物を捕えるために様々な工夫をしてきました。例えば、大型のセイウチやクジラなどは、鉋につなげたロープに抵抗となる浮き袋をつけることでスピードと体力を奪いつかまえやすくします。サケやマスはおとりと鉋を用いて捕らえます。おとりはセイウチの牙や骨でてきており、小魚の形をしています。おとりを水中で泳がせることでサケをおびき寄せ、狙いを定めて鉋でしとめます。サケを突く鉋は、独特な三つ又の形をしています。中央の鋭い針がサケの胴体を刺し、その左右につけられた針がサケの胴体をはさみとつかまえて離さない仕組みです。



鉋でサケを突くー

★ここで紹介した道具は、狩猟採集コーナーに展示してあります。どんな道具が実際に見てみましょう。

さいしゅうしゅりょうみん

採集 狩猟 民 ムブティ



ムブティは、アフリカ中央の森林地帯、コンゴ盆地北東部のイトウリの森に約3～4万人住んでいます。

背が低く、男性は平均145cm前後、女性は135cm前後であるため、ピグミー(小さい人)とも呼ばれてきました。家族5～20からなる、バンドという居住集団をつくり、森の中で移動生活を送っています。

森棲みの民

ムブティは、野生のイモ類、キノコ、木の実などを採集し、弓矢や網を用いてダイカー、サルなどの小型動物を狩猟します。網を用いた狩猟をネット・ハンティングといい、蔓の内皮を編んで作った高さ1～1.5m、長さ40～100mのネットをつなぎ合わせて円形に張りめぐらし、動物を追いたててネットに絡ませてつかまえます。ゾウなどの大型獣を槍でしとめることもあります。蜂蜜も重要な食糧で、ハニー・シーズン(蜂蜜の季節)と呼ばれる4～6月には、食物の70%が蜂蜜でまかなわれます。

森の外との関係

イトウリの森の近くにはムブティだけでなく、農業を営む人びとも住んでいます。ムブティは彼らと共生的関係を形成し、8月から11月の雨季の間、ムブティは森を出て農耕民の畑仕事を手伝って生計をたてています。狩猟で得た肉や蜂蜜を農作物と交換したりもします。ムブティは、かつては独自の言語を持っていましたが、現在はその言語をなくしてしまい、近くに住む農耕民の言語を借用して使っています。またムブティは、歌やダンスが上手なことでも有名です。

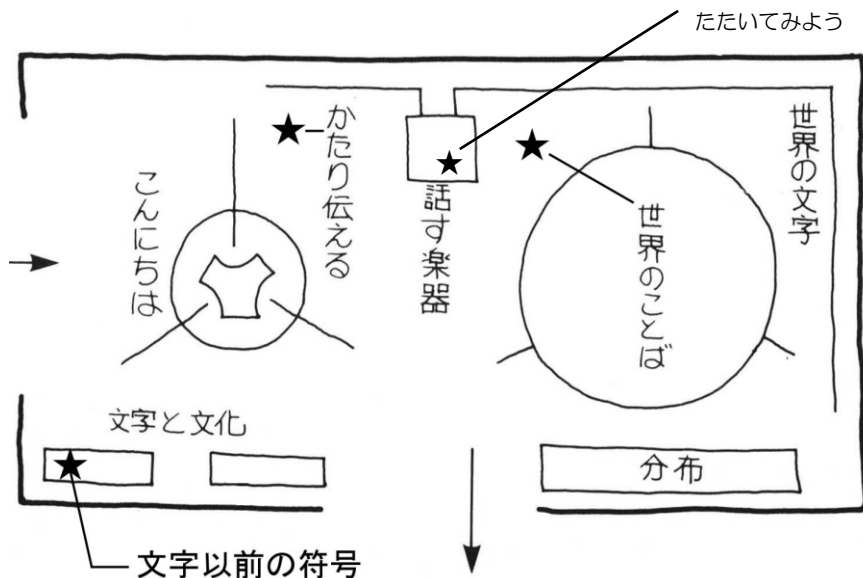
イトウリを含めたアフリカの森林は、1990年代から外国企業による開発が進み面積が大きく減少しました。森の近くを伐採会社のトラックが走るようになり、モノや人がひんぱんに出入りするようになりました。過度な伐採の影響で環境破壊が進んだ土地もあります。森の民のくらしは、森の外—私たちを含めたグローバルな関係の中で変わりつつあります。

ほんかんだい しつ げんご
本館第3室：ことばの世界——言語

“ことば”はヒトを他の生き物からくべつ 区別する とくちょう 特徴のひとつです。
 人類じんるいは、数万年前から言語を使用していたと考えられています。
 お互たがいの意志いしを伝え合うために、音や声を発し、記号を用い、
 そしておよそ5,000年以上も前に文字を発明しました。言葉の
 使用は、ちゅうしょうてき しこう 抽象的 思考を かのう 可能にし、また知識を次の世代に でんたつ 伝達し
しゅうせき 集積させていくのに重要でした。

この展示室では、言語の役割とその たようせい 多様性を、民族資料とともに音声や映像で紹介しています。

★体験コーナー
 ファン人の太鼓を
 たたいてみよう



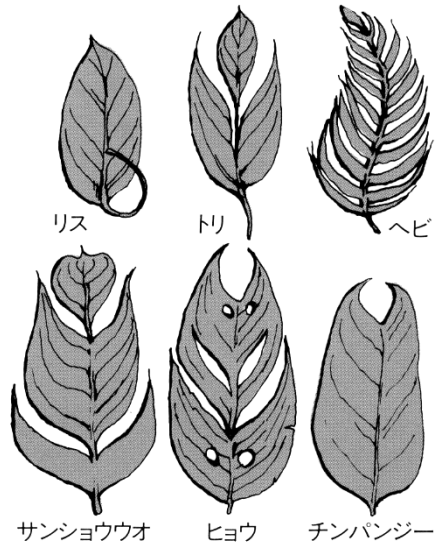
LANGUAGE

To communicate with each other, human beings use languages consisting of sounds, writings and symbols. This hall explains the role and diversity of languages.

文字以前の符号—エコンビ^{ふごう}

コンゴ民主共和国(旧 ザイール)のイトウリの森で採集^{さいしゅう} 狩猟^{しゅりょう} 生活をする民族ムブティが、カサブルという植物の大きな葉でつくるエコンビと呼ばれる目印は、動物の種類や自分の属^{ぞく}する集団をあらわします。

獲物^{えもの}を追うとき、根元^{ねもと}を進行方向に向けて置いてゆくことによって、道に迷わず、仲間に行き先を伝えることができます。



話す楽器：太鼓ことば^{たいこ}

西アフリカから中部アフリカにかけての地域では、人間が話す言葉の特徴^{とくちょう}をなぞって、太鼓の音の高低^{こうてい}、強弱^{きょうじやく}、長短^{ちやうたん}によりメッセージを伝える習慣^{しゅうかん}があります。写真はカメルーンのファンの太鼓です。

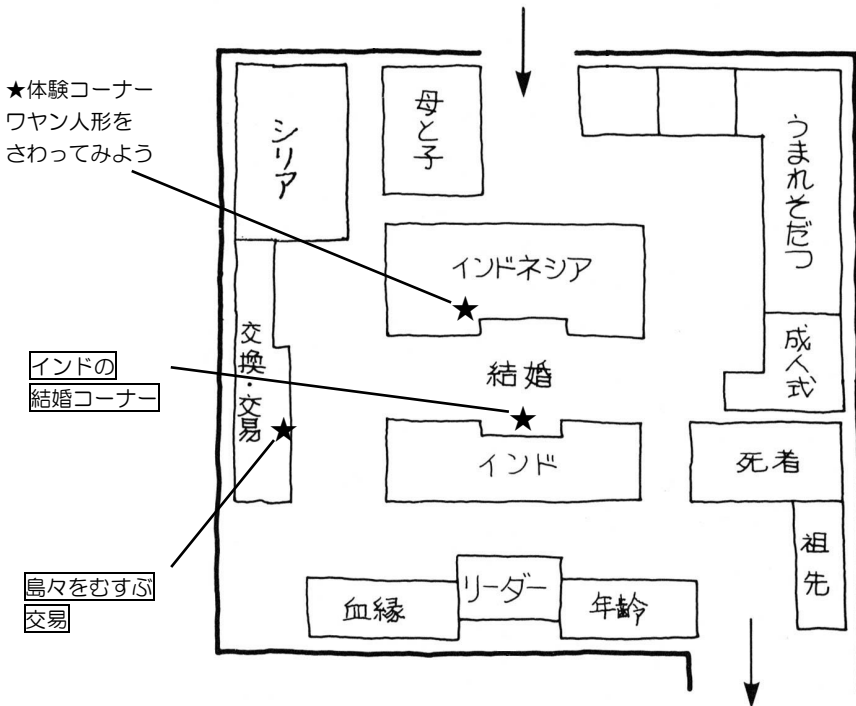
マホガニー製のこの太鼓の音は数 km 先まで届き、森に働きに出かけている仲間を呼び戻したり、他の村へ何かを伝えたいときに用います。

熱帯雨林の森では狼煙^{のろし}をあげても煙は葉に遮^{さえぎ}られてしまいます。一方、太鼓の音は人間の声よりも遠くまで響くため、電話や無線^{むせん}のない時代、とても優れた通信手段^{すぶ}でした。現在でも祭りや儀礼の場を中心に使用されています。



ほんかんだい しつ しゃかい
本館第4室：人のつながり——社会

ヒトは、家族をはじめ、いろいろな社会関係の網の目の中で生きています。ヒトの一生をたどりながら、さまざまな社会のしくみを説明し、社会を作って生きる人類という側面を、1000余の世界各地の民族資料と40数プログラムの映像から紹介します。



SOCIETY

From birth to death, man's life is a serial reproduction of human relations. This hall presents various kinds of social systems such as family, kinship, trade and community.

うまれ育つ：出産から少年まで

- | | | |
|---|-----------|-----------------------------|
| 1 | クカクカの山の出産 | パプアニューギニア (1968) |
| 2 | 頭と顔の整形 | ベネズエラ、ヤノマモ (1974) |
| 3 | 子供の命名式 | インドネシア (1970) とエチオピア (1980) |
| 4 | 森の狩人としつけ | コンゴ民主共和国、ムブティ (1972) |
| 5 | チベットの出家 | ネパール、ムスタン (1977) |
| 6 | 正月とこども | 中国、雲南省、タイ (1981) とアシ (1981) |

うまれ育つ：成人式

- | | | |
|---|------------|----------------------------|
| 1 | カツオ漁成人式 | ソロモン諸島 (1975) |
| 2 | ワニの成人式 | パプアニューギニア、セビック川流域 (1975) |
| 3 | ムブティの成人式 | コンゴ民主共和国、イトウリの森 (1982) |
| 4 | 割礼と抜歯 | エチオピア (1972) と南スーダン (1979) |
| 5 | ミツオゴの成人式 | ガボン (1973) |
| 6 | 囲いの中で美女にする | ブラジル、カマコラ (1981) |

家庭をつくる：交際と求婚

- | | | |
|---|------------|----------------------------|
| 1 | メンティの男女交際 | パプアニューギニア (1981) |
| 2 | 求愛の笛吹き | バングラデシュ、ムル (1973) |
| 3 | 求愛のダンス | パプアニューギニア、トロブリアンド諸島 (1976) |
| 4 | 雲南の歌垣アシ跳月 | 中国、雲南省、アシ (1981) |
| 5 | チロルの冬追いまつり | オーストリア (1971) |

家庭をつくる：結婚式

- | | | |
|---|--------------|------------------------|
| 1 | 貝貨で嫁もらい | ソロモン諸島、マライタ島 (1973) |
| 2 | アムハラの幼児婚 | エチオピア (1980) |
| 3 | ムブティの結婚式 | コンゴ民主共和国、イトウリの森 (1982) |
| 4 | ロマ(ジプシー)の結婚式 | マケドニア(旧ユーゴスラビア) (1975) |
| 5 | クレタ島の結婚式 | ギリシャ (1972) |
| 6 | バラの谷の結婚式 | ブルガリア (1976) |

社会のしくみ：戦争と平和

- | | | |
|---|-------------|-----------------------------|
| 1 | ゴゴダラのカヌーレース | パプアニューギニア (1977) |
| 2 | 養子縁組 | インドネシア、イリアンジャヤ、アスマット (1982) |
| 3 | 藩王の裁き | イエメン (1977) |
| 4 | ヨボのまつり | ベネズエラ、ヤノマモ (1975) |
| 5 | 部族対抗大相撲 | ブラジル、アマゾン河支流 (1974) |

社会のしくみ：呪術師とシャーマン

- | | | |
|---|-----------|--------------------------|
| 1 | 呪術で病気をなおす | コロンビア、アマゾン河支流 (1972) |
| 2 | 魔の呪術ブードゥ | ハイチ (1982) |
| 3 | 殺人の呪術 | パプアニューギニア、イエローリバー (1977) |
| 4 | 収穫感謝祭 | インドネシア、ダヤック (1972) |
| 5 | 災厄ばらいの家祭 | 韓国、京畿道 (1972) |
| 6 | 死者がのり移る巫女 | インドネシア、バリ島 (1973) |

葬礼

- | | | |
|---|------------|---------------------|
| 1 | クカクカのミイラ作り | パプアニューギニア (1968) |
| 2 | ムスタンの鳥葬 | ネパール、チベット (1977) |
| 3 | 鳥の羽根で死者を飾る | ブラジル、チュカハマイ (1981) |
| 4 | 石積みのお墓 | マダガスカル、マハファリ (1975) |
| 5 | ラマ教の火葬 | インド、ラダク地方 (1982) |

祖先とのつながり

- | | | |
|---|-----------|-----------------------------|
| 1 | 祖先供養ママネ | インドネシア、スラウェシ、トラジャ (1972) |
| 2 | 二次葬クワンカイ | インドネシア、ダヤック (1972) |
| 3 | 祖先の頭蓋骨と踊る | パプアニューギニア (1977) |
| 4 | ドックドック | パプアニューギニア、トーライ (1975) |
| 5 | ピスのまつり | インドネシア、イリアンジャヤ、アスマット (1982) |

映像は自動再生しています。ご了承ください。

インドの結婚コーナー：カースト

カーストは、結婚や食事に関する「タブー（禁忌）」など厳格な規制をもつインドの階層制の通称です。カーストによる差別は法律で禁止されていますが、とくに地方では今でも社会に根づいています。

ヴァルナ カーストというと、インド古来のバラモン（司祭）、クシャトリア（王侯・武士）、ヴァイシャ（庶民）、シュードラ（隷属民）の四姓と理解されることが多いですが、これは正確には「ヴァルナ（色）」と呼ばれます。古代にヨーロッパ系のアーリア人がインドに侵入して、支配者となりました。肌の白いアーリア人と肌の色が濃い先住民とを区別するヴァルナ（色）という語が使われ、「身分」「階層」の意味が加わりました。混血が進み肌の色では区別できなくなったあとも、この語は依然として「階層」の意味に使われ続けたのです。

ジャーティ カーストとは、ポルトガル語で「家柄」「血族」を意味するカスタに由来する語です。インドでは、カースト集団を「生まれ」を意味する「ジャーティ」という語で呼んでいます。ひとつの村は、ブラーマン（ヒンドゥー教司祭）、地主、農民、金銀細工師、銅細工師、鍛冶屋、土器職人、織物職人などの職能集団、すなわち数十の「ジャーティ」で構成され、それらは、浄と不浄（ケガレ）の観念に基づいて、上下の序列がつけられています。

タブー そのために、カーストの上位の者が下位の者と食事を共にすることは、ケガレが移ると考えられ、タブーとされています。また、カーストが異なる者同士の結婚もタブーとされ、「カースト内婚」（同じジャーティ内で結婚する）が行われます。ただし、婚姻が許される同程度のジャーティもあり、その場合、女性はより上位の男性に嫁ぐのがよいとされ、それを「ハイパーガミー（上昇婚）」と言います。その場合はとくに、たくさんの「ダウリー（持参財）」を嫁側が用意し、婿側の家族に贈与することが求められます。

モノのやりとり ～島々をむすぶ交易

贈り物がつなく関係 人のお付き合いで、「贈り物」は重要な意味を持ちます。私たちが誰かと親しい関係を続けたいと願うとき、想いや願いをこめて物や言葉を贈り合います。ポイントは、貰いっぱなしではなく「お返し」をすること。たとえ見返りを期待されていなくても、感謝の気持ちを表し、別の機会に返礼をすることで、人間関係が円滑に進むというわけです。こうした「贈り贈られる」ことを「**互酬性**」といいます。個人的な関係だけでなく、会社・団体、集落や共同体といった集団同士でも、繋がりを深め強めるためのやり取りがされます。集団間になると、贈り物の行為はより形式的、儀礼的になる傾向があります。

島々をむすぶ交易 ニューギニアの島々では、島でとれる特産品を物々交換して生活に必要なものを手に入れます（交易）。島ごとに手に入る品が異なるため、近隣だけでなく広く遠洋に繰り出し離れた島々とも交易します。交換される物品は、魚、タロイモ、ココナッツなどの食品、土器、樹皮布や網袋などの生活必需品、装飾品、動物の牙、貝、鳥の羽などさまざま。交易品は、数々の島を経由しながらさらに遠く離れた島へと運ばれていきます。カヌーでの危険な航海を経て来た人々は大いに歓迎され、宴会に招かれ、もてなされます。

交易へは訪問先の儀礼や祭りに招かれたとき、新造カヌーの披露などの際に出かけます。交易は大体の品目の目安が決まっていますが、贈り物の形をとるので、親しい仲だとあげすぎたりもします。交換の成果は儀礼や祭宴の場で評価されますが、質や量もさることながら、誰から誰に贈られたかという系譜も重要です。

島で生きる人々にとって、他の島との関係を良好に保つことはくらしと直結する問題です。そのため交易は、単なる経済活動だけではなく、友好関係を深め人々の結びつきを強める役割を持っているのです。

じゅじゅつ ちようそう
呪術にもちいる彫像

これは、コンゴ民主共和国（旧 ザイール）に住むコンゴ人たちの呪術医の彫像である。体中に鉄片が埋め込まれているようすを見て、ワラ人形に五寸釘を打ちつける日本の呪術を思い出す方が多いと思う。ところがこれは、他人を突然の不幸におとしいるために使用する人形ではない。かえって、他人からの邪悪な呪術から護ってくれる呪術医を表わしており、防御のために使用するものなのである。

彫像の腹の部分には二つの突起がある。ここには、呪術から守ってくれる呪薬が納められているのである。この突起には、鏡の破片をつけたふたがされる。鏡は、悪霊の目をくらませる、あるいは見えなくする働きがあるとされている。また、彫像の手には、小さな槍や刀が持たされていて、これで悪霊と闘うとされている。口は開かれ、体内にとりついた悪霊を吐き出しているようすを示す。呪薬は腹だけでなく、頭に納められていることもある。

一般にアフリカの彫像では、男女の違いが明確に外見で分かるように彫ってあるが、この彫像では、男女の差はさっぱり分らない。ただ、呪術医、あるいは、悪霊から身を護るための彫像としての特徴があるだけである。同様な特徴をもった彫像は、人物像だけでなく、動物の像としても作られることがある。



ほんかんだい しつ うちゅう かち
 本館第5室：こころの宇宙——価値

えんげつしや いす
 イアトムル人の演説者の椅子

パプアニューギニアのセピック川中流域に住むイアトムルの人々は、
 迫力に満ちた神像や仮面の作り手として知られます。彼らの村の中央には
 精霊小屋が建ち、その内部には精霊や祖霊をかたどった彫刻や仮面などが
 置かれています。精霊小屋はイアトムルの人々を守護する精霊や祖霊が集う
 場所であるとされ、さまざまな儀礼が執り行われる神聖な場所です。



この「演説者の椅子」（イアトムル語で“テケ”）と
 呼ばれる椅子も精霊小屋の中に置かれます。椅子の
 側面には大きな顔をもつ立像がとりつけられていま
 すが、これはイアトムルの人々が生きる大地を生み出
 した創造主ワグンをかたどったものとされています。
 この椅子と立像は別々に作ってつけられたものでは
 なく、はじめから一本の太い丸太をくりぬいて作られ
 ています。

座ることのない椅子

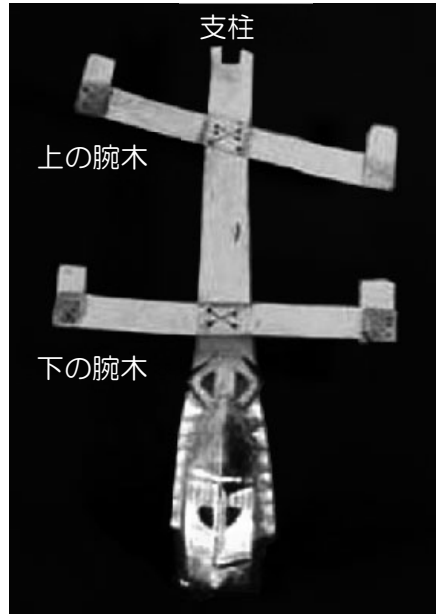
この椅子は「けっして座ることのない」椅子です。
 精霊小屋に集う男たちは、腰かけたり寝そべったり
 するための台を使います。ふだん男たちは「演説者の
 椅子」に腰かけることはもちろん、触ったりすること
 も厳しく禁じられています。村の中での政治的な取り決めやもめごとの解決な
 ど、イアトムル社会にとって何か大切な問題が起きると、男たちは精霊小屋に
 集まって議論をします。演説をする男は、ある特別な葉（ユリ科植物）の束を
 手に持ってこれをときおり椅子にたたきつけながら、大きな声で自分の意見を
 まくしたてます。男たちは椅子に葉をたたきつけることによって、偉大なる
 創造主の力を自らのうちに呼び込み、その力を言葉に込めて
 発しているのです。

ほんかんだい しつ うちゅう かち
 本館第5室：こころの宇宙——価値

ドゴン人のカナガ仮面 かめん

これは、ドゴン人のカナガと呼ばれる仮面です。仮面の顔部分の上に、“キ”形の飾りが乗るといふ独特の形をしています。飾りの中央の支柱は世界の軸を、上の腕木は天を、下の腕木は大地を表すとされます。

ドゴン人は、西アフリカ、マリ共和国の中央部に住む農耕民です。ドゴンの神話は天地創造の神話をはじめとして、壮大な宇宙観、世界観を持っています。ドゴン人は、特徴ある凶形を規則的に用いた仮面を作る人々として有名です。仮面の踊りは、彼らの神話の世界を鮮やかに表現します。



死の世界と仮面

ドゴンの神話では、人間の過ちによって世界に死が出現し、その混乱を鎮めるために死者をかたどった仮面が作られるようになったと語られます。その後、狩人が獣を殺すたびに、あるいは何か重大な事件が起きるたびに仮面が作られるようになりました。仮面のモチーフはシカ、サル、ウサギといった野生動物から人間、そして首長の家までさまざまです。仮面は死と、死に関わる儀礼に結びついています。死者をほうむる儀礼に仮面が登場し、仮面の力によって死者は生者の世界と切り離されます。

死者を精霊の世界へ送り出す喪明けの儀礼では、仮面をかぶった男たちが太鼓の伴奏に合わせて踊ります。仮面にはそれぞれ決まった踊りがあり、神話に沿ったストーリーが演じられます。カナガ仮面は儀礼の最後に登場します。踊り手は仮面の飾りの先を大地に打ち当て激しく踊ります。この動きは鳥を表すとも、創造神が世界を創造する様子を表すとも言われます。

ほんかんだい しつ うちゅう かち
 本館第5室：こころの宇宙——価値

ヒンドゥーの神がみ：シヴァ

ヒンドゥー教には、実に多彩な神様がいます。その中でも、現在、ヒンドゥー教を信仰する人びとの間で特に人気の高い神のひとりが、「シヴァ」です。シヴァは、宇宙の破壊をつかさどる神で、ブラフマー（宇宙の創造をつかさどる）、ヴィシュヌ（宇宙の維持をつかさどる）とともに、ヒンドゥー教の三大神と呼ばれています。シヴァは、両目の間に第三の目を持っており、彼が怒るときには激しい炎が出て、すべてを焼き尽くすとされています。

シヴァはまた、108種の舞踊を演じる「舞踊の神」ともいわれ、宇宙にあまねく満ちている力を示すナタラージャ（舞踏の王）の姿として表現されています。神話によると、シヴァと論争した異教徒が怒って、虎、蛇、小人（無知、暗黒の象徴。アパスマーラ）を作り、つぎつぎと攻撃してきました。しかし、シヴァは笑いながら虎の皮をはいで身につけ、蛇を首に巻き、小人を踏みつけて踊り続けたといいます。この神話をもとにナタラージャの像が作られています。

シヴァは破壊の神とされていますが、破壊した世界を再建する創造力も持つ神です。宇宙は破壊されることによって、創造、維持というサイクルを繰り返します。ナタラージャの像は、シヴァのこうした宇宙的な活力を表現したもののなのです。



ほんかんだい しつ うちゅう かち
 本館第5室：こころの宇宙——価値

ヒンドウーの神がみ：ガネーシャ

ゾウの頭を持つガネーシャは、シヴァとその妃^{きさき}であるパールヴァティの息子です。どうしてガネーシャはゾウの頭をしているのでしょうか？その理由は次の通りです。

パールヴァティは、夫の留守中に自分の体の垢^{あか}を集めて人形を作り、それに生命を吹き込みました。こうして生まれた息子に彼女は満足し、用事をいいつけました。それは彼女の入浴中、家に誰も入れないように見張りをすることでした。そこへシヴァが帰ってきましたが、ガネーシャは父と知らず、母の言いつけどおりにシヴァを中に入れようとしました。シヴァは怒ってガネーシャの首をはねてしまいます。

パールヴァティは息子の死を^{なげ}嘆き悲しみました。シヴァは^{あわ}哀れんで、この息子を生き返らせることにし、部下に命じてガネーシャの頭を投げ捨てた方向に探しに行かせました。しかし見つけることができず、最初に出会った動物、つまりゾウの頭を持って帰ってきたので、それをガネーシャの頭として取り付け、復活させたのです。

現在ガネーシャは、^{しょうがい}障害を取り除き、成功と幸運をもたらしてくれる^{げんせりやく}現世利益の神として、また、^{はんえい}富と繁栄の神として信仰を集めています。

